地域の健康と幸せをつなぐ　社会医療法人聖ルチア会　聖ルチア病院広報誌

ルチアめーる

2023
April
春号
vol.10

虐待医学の小児救急医が精神科医療を学ぶということ

神薗 淳司 医師・精神科と小児科の"橋渡し"を目指しています

- 特別企画「依存症支援」
- 重度認知症患者デイケア すずらん
- FOCUS／回想法
- 聖ルチア病院のプロフェッショナル／薬局

虐待医学の小児救急医が精神科医療を学ぶということ

精神科　神薗 淳司

専門医／日本小児科学会専門医、日本血液学会専門医
理事および会長／日本子ども虐待医学会　理事、
日本小児救急医学会 理事 将来検討委員会委員長
日本 SIDS・乳幼児突然死予防学会 理事
日本小児科学会 評議員 小児救急委員会 副委員長
小児医療提供体制委員会
予防のための子どもの死亡検証委員会
成育基本法推進委員会
北九州市要保護児童対策地域協議会 会長

すべての医療従事者のための子ども虐待対応ハンドブック（福岡県版）監修
https://www.fukuoka.med.or.jp/doctors/chiiki_iryou/boshihoken/gyakutai-handbook.html

自殺や虐待死・心中などの防ぎ得る子どもの死は依然として増加傾向にあり、家族、学校、地域社会といった子どもの環境に関わる問題として今一度捉え直す必要があります。このような悲しい事態を防ぐには、子どもの心を知り複雑な環境の中で糸を解きほぐす丁寧な支援に加え、地域社会を後押しするマインドが不可欠です。四半世紀従事してきた北九州市立八幡病院小児総合医療センターを退職され、昨年4月より当院で精神科医療を学んでいる神薗淳司医師に聞きました。

家族全体を診る総合診療の姿勢が必要と気づき当院へ

二十五年、四半世紀にわたり故市川光太郎八幡病院名誉院長を師事し、小児救急医療に従事して参りました。１９８０年代の八幡病院小児科創成期から小児医療の隙間、言い換えれば「分野に属さない」「行き場のない」「誰も見てくれない」「医師泣かせ」そんな陰性感情が自然に湧き立つ子どもと家族に率先して寄り添う医療を提供してきました。

新型コロナウイルス感染症の流行で、小児救急医療は激変しました。これまで従事してきた子ども虐待やネグレクトだけでなく、友人や家族との関係で生じる絶望感や無力感のなかで、自傷行為や薬物大量服薬や自殺へのこだわりなど、さまざまな社会心理的問題を抱える子どもや家族が現れました。同時に自分の総合的な診療技能の未熟さを知りました。

家族関係の環境調整が不可欠な事案も多く、小児科医の知識では解決できない壁にも気がつきました。そこには、必ずといってよいほど保護者の育ちや潜在する精神疾患や貧困などの環境の問題など、養育に力を注げない理由が見えてきます。これほどまでに複雑化した小児医療には、当然家族全体を診る総合診療の精神と技能が不可欠だと感じました。大学小児科医時代の先輩である当院理事長・院長の大治太郎先生に相談し、当院での精神科研修のスタートが叶いました。

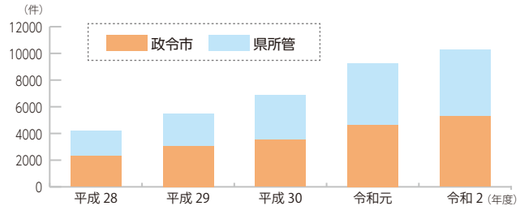
子どものころの経験が大人になっても影響すると実感

現在、子どもの診療のみならず、成人のうつ病や統合失調症、認知症や摂食障害の患者の診療も担当しています。子どものころの養育環境がいくつになっても影響することに驚いています。４０歳代でも８０歳代でも、精神疾患発症の背景には子どものころの逆境的な体験が必ず見えてきます。小児医療の重要さを改めて知ることとなりました。養育能力や発達段階に応じた地域での支援体制づくりは、喫緊の課題であり、成人になってからの精神的な疾患発症の予防の原点と考えるに至りました。

児童精神科は一般的に学童以上を対象にすることが多く、新生児や乳幼児の関わりは主に小児科の診療範囲と考えられています。愛着（アタッチメント）理論でも語られていますが、乳幼児期に築かれる家族との関係性の重要性には、私自身非専門性の中で関わってきました。小児科医が精神科医療を学び、家族のこころに迫る専門性を持って診ていけるようになりたいと感じています。

２０２２年度から、日本専門医機構「子どものこころ専門医」研修制度が本格的に始まりました。3年間で小児科専門医もしくは精神科専門医取得後に取得できる専門性の高い研修です。当院の坂本奈緒先生にご指導を受け、「子どものこころ専門医」の取得を目指しています。

図1. 児童相談所における
児童虐待相談対応件数の推移（福岡県）



資料：福岡県児童家庭課

専門性プラスアルファの連携体制づくりが目標

当院外来は、児童精神専門の医師が複数在籍しています。家族だけでなく、スクールソーシャルワーカー（SSW）やスクールカウンセラー（SC）からも日々受診相談を受けています。家族内だけではなく教育現場の子どもの様子を的確に評価していただける児童精神科医にとって大切なパートナーです。久留米市教育委員会のご尽力で、私自身SSW・SCの皆様との勉強会に参加させていただけるようになりました。福岡県久留米児童相談所にも一時保護している子や心配な家族に面談し、診療に繋げることも増えて参りました。

成育基本法の整備、こども家庭庁の発足など子どもへの社会的支援は大きく動き始めましたが、高齢者施策に比べると不十分で脆弱だと感じています。

私は、北九州市要保護児童対策協議会の会長を務め、教師、SC、SSW、病院などで連携を進めてきました。それぞれが重要な役割ですが、役割の中だけで何ができるか考えているうちは、支援に隙間ができると感じています。

福岡県の虐待拠点病院に指定されている聖マリア病院や当院、福岡県久留米児童相談所を中心に、SSWやSC、警察や検察、行政が参加できる「津福こども環境カンファレンス」を定期開催しています。医療機関に繋がった虐待事例について、各分野の専門家が意見を交換し予防には何が足りなかったのかを毎回話し合っています。筑後地域全体を支える会議に発展させたいと考えています。

自らの専門性にとらわれず「プラスアルファ（おせっかい）の仲間」が一人でも増えることを期待しています。高齢者と同様に訪問看護や通所サービスなど、子どもの支援の側面からも養育や教育モデル地域をつくる気持ちで、この夢を目指したいと考えています。

精神科と小児科の“橋渡し”役で子どもを支えたい

小児科医はそもそも子どもの問題を医師独りで抱えてしまいがちです。自分の限界を知らずに、一人で家族の問題に踏み込み、消耗してしまう小児科医も多いのではと想像しています。精神科医療は、医師のみならず、心理士や看護師、ソーシャルワーカーなど、チームで家族を支えていることが実感できる医療です。それぞれの専門性を尊重し、しっかりと情報共有して患者さんや家族と向き合っています。お互いに任せることで自分の専門性を高められるし、心身の消耗も防げます。精神科医療に学ぶ点がとても多いと感じています。

一方的な支援は得てして「うちは大丈夫」とその支援を拒む家族に変貌します。とくに子ども虐待やネグレクトといった養育環境の悪い家族には、「支援されて当たりまえなのだ」と気楽に相談できる雰囲気を病院や行政、地域でつくっていきたいと考えています。

私一人にできることは限られていますが、精神科医療と小児科医療の橋渡しを進め、日々学んだことを小児医療にフィードバックしていきたいと考えています。

聖ルチア会の在宅支援施設 2

重度認知症患者デイケア すずらん

聖ルチア会の「在宅支援施設」では、住み慣れた場所での暮らしや社会への復帰を支援しています。
今号では、重度認知症患者デイケアについてご紹介します。

対象は、せん妄や妄想などの症状や問題行動があると医師が診断した認知症の利用者様で、心身機能の回復や意欲向上を図ることが目的です。家庭や施設での介護が難しい利用者様が、日中安心して過ごせるようなプログラムを準備しています。

医師、看護師、作業療法士、精神保健福祉士、介護福祉士といったさまざまな分野の専門スタッフが、質の高いケアを提供します。急変時でも、医師の診察や専門的な処置が受けられるので、安心してご利用いただけます。

すずらん3つの特色

久留米市中心部で唯一の重度認知症患者デイケア。
充実した内容をご紹介します。

その1 音楽療法士が常勤

高齢者は喪失感や孤独感を抱きやすいですが、みんなで歌うことで仲間意識が生まれ、安心感につながります。見当識の強化や口腔機能の強化、手足の運動、回想など、目的に応じて楽曲を選択し、日々音楽療法を行っています。

その2 認知症の方への身体機能リハビリ

認知症が進むと活動性が低下し、身体機能の低下や、指示が通りにくく、活動への参加が難しい方も多いです。そこで楽しく、自発性を引き出す関わりや、活動を提供しています。歩けなかった人がリハビリを受けて「トイレまで歩く」と意欲的になった人もいます。本人や家族が気付かなかった力を見つけ、利用者様のやる気につなげていきます。

その3 周辺症状への対応力

職員は精神科病院での勤務経験があるため、認知症の周辺症状（せん妄、抑うつ、興奮など）にも柔軟に対応できます。利用者様の小さな変化に気づき、体調不良時も落ち着いて対応します。医師も毎日、利用者様を診察し、チームでサポートしています。

すずらんの一日

9:00
送迎
身体機能訓練、構音機能訓練

10:00
健康チェック

朝の会
季節の歌、頭から指先、足先まで全身を動かす体操

午前中の活動
音楽療法、脳を活性化させる制作活動（達成感、充実感を得る）

嚥下体操
口腔・嚥下機能の強化

12:00
昼食
主食や副食は、普通食以外におかゆやきざみ食、ムース食など、利用者様の嚥下機能に合わせたものを提供

13:30
軽体操
活動前の準備運動と覚醒を促す

午後の活動
足リハビリ、楽しみながら運動するレクリエーション（傾眠傾向の人の覚醒を促す）

15:00
帰りの会
リアリティオリエンテーション（見当識訓練）含む

16:00
送迎
身体機能訓練、構音機能訓練

活動の内容

午前中は脳や手先を動かす活動、午後からは身体を動かす活動です。
毎回同じ活動にならないよう、毎週内容を見直しています。

例）今週　月（音療／足リハ）　火（制作／足リハ）　水（音療／レク）
　　次週　月（制作／レク）　火（音療／レク）　水（制作／足リハ）　など
野菜の収穫時期には「園芸」活動を行ったり、季節の行事（直近だと節分の豆まきなど）も行います。

スタッフ

体や脳に刺激を与えるプログラムで、本人の体の中に残っている機能を引き出し、意欲的に取り組めるように支えています。

作業療法士 福田　剛

利用者様の安全に最も配慮しています。皮膚の変化や足のむくみなどの観察を心掛けています。その日の状態にあった活動ができるよう、リハビリ計画を補助します。

看護師 小柳 多恵子

一日楽しく、笑顔で過ごせるように配慮しています。楽しくなるような声掛けを大切にし、介護するときも体の負担が少ないように工夫しています。

介護福祉士 宮本美幸

音楽を通して認知症の方たちと関わっています。懐かしい歌を通して、利用者様の笑顔を引き出せるよう心掛けています。

音楽療法士 井貝 梨紗

安全運転と笑顔であいさつを心がけています。利用者様にとって、その日、初めて会う人ですから、気持ち良い出会いを大事にしています。

ドライバー 馬場 和彦

重度認知症患者デイケア
すずらん
TEL.0942-33-1350
〒830-0048
久留米市梅満町1001

利用者様が地域で継続して生活できるように、ご家族や介護保険サービス提供事業所などと連携し、情報共有しています。また他のサービスを利用されていない方にも、必要と思われるサービスを検討し、適切な事業所につなげることで支援の輪を広げています。

重度認知症患者デイケアすずらん係長
精神保健福祉士　菖蒲 純平

今最も注目の情報にフォーカス!

FOCUS

「給食のおかず、何が好きだった?」。共通の話題は、いくつになっても盛り上がりますね。回想法も同じで、思い出を話すことで精神的な安定感が得られます。認知症への薬を使わない療法として活用されています。

今回のテーマ

回想法

公認心理師 村上 和馬　副看護副師長 西 佑三　看護師 山下 美奈子

季節感や五感に働きかけ

回想法は、自分の過去や思い出を話すことで、自分自身を再認識する機会が得られます。複数の前で話すことで、自分の存在意義を再認識したり、グループのメンバーに仲間意識が芽生えることもあります。日常生活がうまく送れず自信を失った患者様が、昔の自分を思い出すことで、楽しい気持ちになり、自信を取り戻していくのです。

過去を思い出すには、季節感や五感への働きかけが大切。支援者は、テーマに合った話題や写真、品物などを用意しておくとよいでしょう。例えば、節分。豆を見ると、炒る香り、畳に豆が散らばる音、投げつけられた時の軽い痛み、笑い声など、次々と記憶が戻ります。

テーマによっては、患者様の発言が続かないこともあります。支援者は、事前に情報収集してその内容を問いかけると話が広がることがあります。患者様の話を聞くという姿勢が大切で、支援者から話題を提供するだけでなく、患者様から出たキーワードについて「教えてください」などと声かけして促すことも方法の一つです。

【認知症のリハビリ】回想法

過去を思い出すことで、
気持ちの安定や脳の活性化につながる

男女に分かれて実施

当院の認知症治療病棟では、1クール8回(2ヶ月)で行います。当初は男女混合で実施していましたが、男性が遠慮がちだったり、盛り上がる話題も異なるため、2022年4月から、男女に分けて行うようになりました。

女性は、生活やファッションの話題が多いのが特徴。回想法に参加すると「心が落ち着く、ホッとする」といい、「ココアの会」と名付けました。男性の話題は、仕事やお酒が中心。話のきっかけをつくる人、うなずく人、話を締める人と、自然と役割が生まれました。

繰り返しで心身が活性化

回想法は、日付と「これは何の会ですか?」の確認から始め、約30分程度行います。会を終える際は再び、日付と会の名前を確認します。初めに比べ、答えがスムーズに出るようになり、表情が穏やかになるなど変化を実感できます。普段、自室にこもっている人も、回想法に参加すると意欲的になり、認知機能の向上につながることもあります。

回想法を体験すると、心身が活性化する患者様は多いと思います。五感を刺激できるものを活用し、回想法を充実していきたいと思います。

特別企画　依存症支援

ひとりで悩まず、相談を

コロナ禍で、飲酒やギャンブルなどの依存症患者が増加し、悩みを持つ当事者や家族が増えています。
依存症患者と家族を支える取り組みを紹介します。独りで悩まず、相談してみてください。

患者を支えるには、家族会と自助グループ(断酒会)の連携が重要

久留米断酒友の会 家族
中尾 チズ子さん

久留米断酒友の会連絡先
080-5211-9122(中尾さん)

夫は幼少期の家庭環境や成人してからの人間関係等のストレスで酒に頼るようになり、約20年前、保健所の紹介で久留米断酒友の会に入会しました。当時はなかなかなじめませんでしたが、「会に来ている2時間だけでも飲まないで座っていられる、偉いじゃないですか」と、前会長に声をかけて頂いて認めてもらえたと、今でもとても感謝しています。夫は、お世話になった方々への恩返しの為、自分も前会長のように「困っている人に思いを継ぎたい」と願っています。

断酒会は筑後地区内の6会場でも開催されており、どの会場でも参加できます。私は家族として断酒会に出席し、当事者の気持ちを聞く機会があります。当事者は飲酒を止めようと一生懸命です。家事を手伝うなどして頑張っていることを家族に認めてほしいと思っています。それなのに家族が過去の話を持ち出して責めると、気持ちの持って行き場が無くなってしまいます。

私も、当事者の思いが分からず20年間苦しみ、「逃げ出したい」と思うのは日常茶飯事でした。その中で、聖ルチア病院で開催されている「家族会」に出席する事で私の気持ちを分かってもらえると思えるようになりました。会では公認心理師の方が患者の病状を説明され、家族の対応法を指導してくれます。私も依存症について知らない事だらけだったと、気づかされました。

当事者は依存症とはなかなか認めません。依存症は病院や保健所、自助グループが連携して支える必要がありますが受診しなければ何も変わりません。家族はまず「家族会」に連絡してみて下さい。

家族が行動すれば明日は変わって行くと思います。

依存症家族会「シロタエギクの会」のご紹介

当院では毎月1回、依存症のご家族向けプログラムとして「シロタエギクの会」を開催しています。毎回、5〜10人のご家族が参加し、依存症についての講義やコミュニケーションの練習、座談会などを行っています。時には、皆さんと一緒にものづくりをすることで、ちょっとした息抜きの場にしていただいています。講義では、「CRAFT」という手法を取り入れ、プログラムを通じてコミュニケーションパターンに気づいていただくことをご支援しています。

ご本人が当院に通院しているかどうかは問いません。また、アルコール依存症、薬物依存症、ギャンブル依存症等、どのような種類の依存症でも参加可能です。参加のルールとして、個人情報の保護は必ず守っていただき、会の中で出た話は外部へは決して持ち出さないようお願いをしています。また、この会ではコミュニケーション場面の練習も取り入れますが、決して無理せず、「これならできそうだ」と思うものから取り入れていただくようにお伝えしています。

会の目的は下記の4つです

1. 本人にとって有害な飲酒・薬物の使用を減らす
2. 本人を受診につなげる・受診を継続できるようにする
3. 家族自身の生活や、心の安定を実現する
4. 何かあったら相談できるという安心感を持っていただく

まずは当院へ「依存症家族会の件で」とお電話下さい。お電話相談いただいた際に、
ご本人の受診ができそうな場合は、受診相談として対応できます。お気軽にお問い合わせ下さい。

聖ルチア病院のプロフェッショナル　第10回　薬局

薬剤師は、医薬品の適正使用や安全使用を通じて、質の高い薬物療法を提供する役割があります。当院は、入院から退院まで途切れない薬物療法を提供する体制を整えていること、チーム医療に積極的に参画していることが特色です。

入院時には患者様やご家族に薬歴を確認し、最適な薬剤適切な用法･用量を医師に提案します。入院中は服薬指導を通して、治療効果の確認や副作用の予防･早期発見に努めています。退院後も安全にお薬を服用してもらうため、副作用の初期症状などを一人ひとりの理解度に合わせて説明しています。

薬のプロとして、5つの疾患別プログラムで疾患教育にも携わります。また、カンファレンスなどにも参加し、多職種と連携しながら患者様にあったより良い治療の提供ができるよう心がけています。

◀調剤室の様子

◀多職種と連携しながら、薬物療法を確認します

連携先の皆さまへのメッセージ

患者様の入院前から退院後まで、途切れの無い安全な薬物療法をサポートしています。薬物療法で困りごと、不明な点があれば、お気軽にご相談ください。

薬局長　西村　寛

私のしあわせ時間

広角レンズを使い“空”が広く写る構図を意識しています。同じ場所、シチュエーションで撮影しても、“空の姿”は異なります。タイミングを見極め、眼前に広がる感動を一枚におさめられるのが、風景写真の魅力です。

（左:佐賀県玄海町／浜野浦の棚田　右:山口県／角島大橋）

重度認知症患者デイケア すずらん係長
菖蒲 純平

社会医療法人 聖ルチア会
聖ルチア病院
St.Lucia's Hospital

〒830-0047　福岡県久留米市津福本町1012
TEL0942-33-1581（代表）
FAX　0942-33-1586

関連施設

- 精神科デイケア、デイナイトケア、ショートケア
- 重度認知症患者デイケア すずらん
- 訪問看護ステーション クローバー
- 訪問看護ステーション クローバー おおき
- グループホーム ルピナス